IS乗りは、魔法関係者

凶鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ乗りは、魔法関係者

【Ｎコード】
Ｎ５６９２Ｙ

【作者名】
凶鳥

【あらすじ】
魔法の存在する世界で事件に巻き込まれ目が覚めたらウサギ耳を着けたマッドサイエンティストの目の前だった。
彼は、この世界でどの様生きて巻き込まれていくのか。

ＩＳ世界に現れたもう一人の適合者

とある魔法が存在する世界で事件に巻き込まれた。
目が覚めると目の前にウサギ耳を着けたＩＳの母であるマッドサイエンティストの目の前だった。そして、彼女と一緒に世界を周り世界を知った。時が流れ彼は、専用機を持ってＩＳ学園に降り立った。

この小説は、作者の自己満足の為に制作されています。原作崩壊・キャラクター破壊・裏切り・オリキャラ駄目の人は、お帰りください。

良いですね？
本当に良いんですね、後悔しても知りませんよ。
では、後悔しないと言うならどうぞお入り下さい。作者の独自判断偏見と原作崩壊だらけの駄文小説に。

プロローグ？

とある魔法が存在する世界で遺跡調査の任務をしている。

「はぁ～何処が安全な任務だよ！たくっ…さっさと封印処理を施そう」

遺跡の奥深くに鎮座する様に置かれた手甲…見た目は、普通だが禍々しい程の魔力を放っていた。

「さて、ｓｅｔｕｐ」

「ｙｅｓ．Ｍａｓｔｅｒ」

彼の首に有るネックレスの蒼いビー玉から音声を発し、彼を黒く所々金色の混じった光が包み込み、白い騎服に包み込まれた少年がロッドを手に持ち魔力を放つ手甲に封印処理を施そうとしたが…

「っ…うぁ！？」

手甲が意気なり彼の目の前まで迫った瞬間強烈な光を放ち彼を呑み込み光が収まると、世界から彼と手甲は、消え去っていた。

プロローグ？

光に包まれた少年が消えたと同時かん。

地下研究施設

「ん～何で、機動しないのかなぁ？」

女性が機械に向かって何故か機動しない物を指で、突っついていた。

「何で、このＩＳ女性に反応しないんだろう？他の子達は機動したのに？」

インヒィニットストラトス通称『ＩＳ』平たく言うとパワードスーツ。日本の篠ノ之束博士が開発したＩＳは、現代兵器を著しく上回るスペックを持つものの女性しか反応しないはずなのだが、創ったわ良いが反応すらしない。

「ん～分かんないや…休憩休ｋ…」

女性が目を外した瞬間強烈な光が薄暗い研究室を一瞬照らした瞬間、機動しなかったはずのＩＳが機動し出し見慣れない少年がＩＳに抱き抱えられる様に収まっていた。

「えっ！？…何処から来たの？君は、ダレだい？」

ＩＳに収まっていた少年からは、返事が返って来ることは、無く不思議に思い近付いてみてやっと理解した。

きゅぅ〜…

「寝てるよりも…気絶しちゃってるね。」

これが、ＩＳ開発者である人と少年の出会いである。

「この子どうしょう？」

プロローグ？（後書き）

封印処理を失敗。ロストロギアと一緒に飛ばされ、気絶したまま初接触締まらない？

主人公とＩＳ紹介（前書き）

簡単な紹介

主人公とＩＳ紹介

今作中のオリジナル主人公
名前：ライト・スピィルス

見た目：キラ・ヤマト（目付きを鋭く甘さを消した感じ）

所属：管理局航空部隊（現在ＩＳ学園生徒）

年齢：１０才（開始１５歳）

趣味：小説・料理・機械整備

好き／嫌い：寝ること／寝ることを邪魔されること・面倒くさ事

専用ＩＳ：雪月華（セツゲッカ）

見た目：ストフリの白銀一色

期待の特徴として、月灯りに照らされたような冷たく何処と無く柔らかい白銀。エネルギーを魔力転換式にしてるため５００００００迄有るが基本定められたエネルギー１０００使用

武装
自立行動型：４０枚からなる翼型ビット（射撃）
遠距離射撃型：ライフル
中距離射撃型：レイルガン近距離剣撃型：ブレード

単一使用

魔力転換式のエネルギー使用

主人公とＩＳ紹介（後書き）

変わるかも。

目覚め（前書き）

寝坊助主人公がやっと起きた！！

目覚め

ライト視点

「うんっ…ん？」

強烈な光がライトを包み込み目が覚めると、自分が今まで居た空間と違う事に困惑してると…

「あっ目が覚めたんだねヤッホー大丈夫？意気なり現れてビックリしたよ～♪」

声を掛けた人に目をやると頭にウサギの耳だろうかそんな物を着けた女性が居た。

「済みません、俺何で此所に？」

「ん？覚えて無いのかな？光と一緒に現れたんだよ？」

「強い光…！？済みません此所って管理世界の何番目ですか！！」

自分が現れた理由を聞いて割れに帰り自分の居た世界か気になった。

「管理世界って何の事かな？ここは、アマゾンの地下にある私の隠れ家（研究室）だよ♪」

「アマゾン？」

自分の知識にそんな所は、存在せず別世界に飛ばされた事を知った。

一応デバイスで連絡を取ろうとしたが反応無し…と言うことを女性に話したところ

「初めて見たよ君見たいに時空を超えた人。分かりやすく言ったら、パラレルワールドかな♪」

「……パラレルですか。どうするかな～コレから…」

自分が知らない世界に飛ばされ、しかもいく宛が無く呟くと助け船を出してくれた。

「君に興味湧いたし、私の助手しない？と言うかなってね♪」

「助手ですか…行く宛何て有りませんから。お世話になります。あっ俺は、ライト・スヒィルスです。」

「ライト君ね、私は……篠ノ之束だよ宜しくラト君♪」

「ラト…分かりました。此方こそ宜しく束さん。」

「うん宜しい♪」

束さんの元で生活する事になった。

目覚め（後書き）

短く区切って、考えての亀更新たまに後組まれに長くなるかも？

一変した生活（前書き）

思いついたので投稿。

一変した生活

篠ノ之束さんのところに転がり込む形で、助手となって早くも1年が過ぎた…

「束さん、何時まで弄ってたんですか！！ちゃんとベッドで寝なさい！！」

「あぁ、たくっちゃんと食べなさい！」

「ほら、動かないの！髪の毛拭けないだろ！」

等々年上の筈なのに手の掛かる妹見たいな感じになりつつあるが目が冴え、ＩＳを弄くる時だけ真剣に取り組んであぁやはり凄い人だと思う。それ以外は、アレだが。

「ラト君、珈琲お代わり貰えるかな？」

「すぐ用意しますね。」

今の束さんが取り組んでいるのは、今まで機動せずライトを認識し機動したＩＳ完成したら、俺専用機として使って良いらしい。

ピィー

「おっと、お湯が沸いたな。」

珈琲を束さんのマグカップウサギのマーク付きに注ぎ入れ、溢して機械を駄目にしないように少し離して置き…

「束さん、お代わり出来ましたよ。熱いですから気を付けて下さいね。」

作業の手を一旦休め、注がれた珈琲を一口

「うん♪やっぱりラト君の入れてくれた愛情タップリ珈琲美味しいね♪」

「あはは、コレからも愛情タップリ注ぎますね（笑）」

「うん♪…と、ラト君の射撃データーと近接データ録りたいんだけど大丈夫？」

「大丈夫ですよ。ようやく乗れるんですね？」

「ラト君が持ってた…何だっけ？」

「デバイスですね。」

「そうデバイスのお陰で何とラト君の魔力をエネルギーに転換して使う事が出来る様になりましたしかもデバイスのＡＩを使ってコミニケーション出来る様にしましたぁ～誉めて誉めて♪」

「はいはい。」

頭を撫でられる束さんは、ウサギじゃなくて尾っぽを振る犬に見える。兎に角可愛い。手を離すと…

「あっ…」

もっと撫でて欲しいなって顔してくる。

「（可愛いなチクショウ！！）」

暫く撫で続け、満足したようで本題のデータ録りになった。

バヒュン…バヒュン…バヒュン…

５００ｍ先の的（米粒大）に当てる事数回可なり集中力を使う為データ録りは、二日に分けた。

「凄いね～♪ちーちゃん見たいに正確に的に当てるし、切り口（木材）も綺麗だよ♪」

「あの～ちーちゃんってダレですか？」

「ちーちゃんは、ちーちゃんだよ♪えっとね織斑千冬って言う幼馴染みですっごく強いんだよ♪」

「織斑千冬…それれで、ちーちゃんですか。」

「ん？ラト君目付き変わったねぇ～戦って見たい？」

「出来るんですか！？」

「この天才束さんに任せなさい！ちょうどドイツに行く予定だったのだよ♪じゃ仕度しよ♪あっそれとＩＳの名前決めた？」

「はい、雪月華です。」

「月に照らされた雪の華…良い名前だね♪じゃぁもうラト君のだね。準備して行こっか♪」

「はい！っで此処どうします？」

「ん～後々面倒くさいし、荷物出し終わったら破壊しちゃおう！景気よくバァンって♪」

その後、束さんお手製の人参型ロケットに荷物を詰め込み、研究所に時限式Ｃ４（プラスチック爆弾）を大量に埋め込み新たな地に向かう事になった。

余談だが、火薬の量が多すぎたのか研究所から半径一キロの大穴が空いていた。メディアで隕石騒ぎになっていた事をここに記しておく。

一変した生活（後書き）

年齢を感じさせない篠ノ之束さん…本当に歳上か？

次は、ドイツ！！

Ｂｒｏｃｋｅｎ行ってみたい？

ドイツだぁ！！（前書き）

織斑千冬さん登場！！

書いてて分からなくなって来た…話が合わないかも？

ドイツだぁ！！

アマゾンの研究施設からドイツに行く間地獄だった。

「ラト君、ちゃんと掴まってないと危ないよ～♪」

「うんなこと言ってmグベ…」

バン！

アマゾンの奥地からドイツまで所要時間約３０分ほど。ロケットの中は、急激な加速力によって後ろに飛ばされたライトは、束さんに言い終わる前に後部の鉄板に押し付けられた。ミシミシ！っと此が減速するまで２０分間ずっと重力に押し付けられた。

「おぇ…白い悪魔が優しく感じる（泣」

ロケットから降りたライトは、新人の頃しごかれた管理局の白い悪魔（高町なのは）が優しい方だったと改めて感じた。そして下っ凶の束さんは、『うん♪流石天才束ちゃんだね、予想した通りの時間に着いたよ♪』と言った。

「（死ななくて良かった。）で此れからどこに行くんですか？」

ドイツに来たのは、束さんが強いと言った織斑千冬さんの所なのだが、場所を知らない為聞いてみた。

「ん～とね、ドイツ国内軍事施設でＩＳ配備特殊部隊の所だよ。ちーちゃんが確か教官をしてる筈だし、束さんは、そこの知り合いに顔を出す予定なのだよ♪」

「知り合いですか？司令官とか？」

「そうだよ、ハッキングしてバレちゃって友達になったんだ♪」

「今、ハッキングしてって！？大丈夫何ですか！！」

「大丈夫だって♪心配してくれるのかな？」

「そりゃあそうでしょ！？」

「ん♪ありがとね、じゃあＬｅｔ' ｓ　Ｇｏ！！」

束さんの掛け声で、目的地に向かった。そして二人を出迎えてくれた人が織斑千冬さんだった。彼女は、艶やかな黒い髪で凛とし軍服が栄える様な人と言うのが俺の印象だった。

軍施設内

「束、お前が他人に興味持つなんて珍しいな。」

「ん～そうかなぁラト君は、助手兼男性初ＩＳ乗りだからね♪」

「今何て言った？私の聞き間違い出なければこのラトと言う少年がＩＳを操れると聞こえたんだが？」

「間違ってませんね、後ラトでわ無くライト・スピィルスと言います。」

千冬さんの答えに束さんの代わりにライトが答えた。

「束…何をした！！」

「束さんは、何もしてないよ？憶測になっちゃうけど、束さんが創ったＩＳのコアがラト君を求めたんだと思うんだ。それにラト君のＩＳわね、この天才束さんでさえ機動出来なかったのに…彼をマスターと認識して受け入れちゃったんだよ。」

確かに束さんが言った事は、間違っていない。ライトが雪月華と対話する事で分かった事を伝えそれを今、束さんが千冬さんに説明していた。（別世界から来たこと以外）色々考えている内に束さんと千冬さんとの間で何か有ったらしく…

「厄介だが私が預かろう。」

「じゃっ任したよ。ちーちゃん、四年後にＩＳ学に転入宜しくね～じゃあね～♪」

「えっ四年後って束ｓ…まじか！？」

ライトがビックリして束さんに聞き返そうとしたら既に居なくなっていた。

「スピィルス、早く来い！」

「了解しました！教官殿！！」

「では、私が居る一年間私がスピィルスを鍛え上げるから覚悟しろよ。後三年は、この部隊で吸収するなり、己を磨け良いな？」

「宜しくお願いします。」

まあ束さんが強いって言ってたしその力見せてもらうとしますか。

束さん…会ったら覚えとけよ？

ドイツだぁ！！（後書き）

読み辛くて御免よ！
でも此が作者の限界！！
言ったよね後悔しないならいいよって？
後悔したならｇｏｏｄ－ｂｙｅ
物好きな人だけどうぞ！
次は、シュヴァルツ・ハーゼ

黒ウサギ（前書き）

文才無いって辛い。取り敢えずドイツ編です。

黒ウサギ

束さんにおいてけぼりを食らわされ、織斑千冬さんが教官をしているＩＳ配備特殊部隊に短期間（数年）加わる事になった。

「よし、諸君今日から短い間だがシュヴァルツ・ハーゼに入る物が居る挨拶しろ！」

織斑教官に連れられ演習場の端に部隊の子達（女子ばかり）が綺麗に整列している。

カツカツ…

教官に呼ばれ、部隊の前に進み出て紹介となった。

「三年程シュヴァルツ・ハーゼに組み込まれる事になりました。ライト・スヒィルスで有ります！」

管理局に居たときと同じ様に直立不動敬礼をしながらの挨拶をし終わり、教官から一言入った。

「スヒィルスは、機密事項に値する世界初の男でＩＳ使いだ。この部隊以外口外するな！」

「「「ｓｉｒ！！」」」

「ラウラ・ボディヴィッヒ大尉、スヒィルスのお守りを頼むぞ。」

「ｓｉｒ！」

ラウラ・ボディヴィッヒと呼ばれた少女は、部隊長なのか同い年ながらも回りと違う凛々しさが有り、銀髪で雪の様に白く目は、片方を眼帯で隠ししてない方は、紅い目が宝石の様に綺麗だった。

紹介が終わり、教官が離れると各自訓練に入って行くなか…声を掛けてくれた。

「ラウラ・ボディヴィッヒだスヒィルスだったな。私が面倒を見てやる。」

「ｓｉｒ！ボディヴィッヒ大尉殿不馴れな事も有ると思いますが宜しくお願いいたします！！」これが、ライトとラウラの出会いである。初日は、シュヴァルツ・ハーゼの施設説明（機密度ｌｅｖｅｌ３以下の）をしてもらいながら各部署を回り、最後に自分に宛がわれた部屋（二人部屋）

「ボディヴィッヒ大尉殿、この部屋は？」

「私とお前の部屋だが？どうした？」

「（女子と相部屋って何？）いえ、何でも有りません！」

「そうか。ＰＸ（食堂）は、０５００～１９３０までなら使用可能だ。風呂は、部屋に有るシャワーだ。質問は、有るか。」

「大尉殿…訓練等は、今日から開始しても？」

ライトの発言に少し思う事が有ったのか少し考える素振りをして

「…構わんが、そうだなまず、体力・射撃精度を見せて見ろ。
メニューは、それからだ。」
まず、時間が時間なので２０?を背負った１０Ｋｍタイムを計った。
舗装された道でわ無く砂利道・林道・泥濘・山道等が織り混ぜられた場所をだ。昔よりタイムが落ちていたが、ラウラからすれば納得する様なタイムを叩き出すと、高圧的な態度が和らいだらしくファーストネームで呼ばせてくれた。
カシャタンッタンッタンッ…カシャタンッタンッタンッ
一定のリズムでライフル（Ｇｅｗｅｈｒ４３）から発射される弾丸は、的に吸い込まれる様に当たって行く。
一通り終えるとラウラは、黙って何か考え出した。
～・～・～・～
「ラウラ大尉殿」
「スヒィルスその何だ…訓練以外は、ラウラと呼んでくれないか？／／」
同年代の男の子と話す間に年齢層に合う喋り方に変わって部屋に戻ると今の状態になっていた。
織斑教官の指導期間が終わってからと言うもの毎日のようにラウラ大尉達との訓練を（ＩＳを使用）繰り返し御互いを高めている。
「今度こそ勝たせて貰うぜラウラ！」

ライトは、模擬戦開始と同時に離れるとライフルを構え一発

バシュッ

「また、それか馬鹿の一つ覚えだな！」

ライフルから撃たれたレーザーを横に傾く形で交わし…

「誰が馬鹿の一つ覚えだって？砕けろ！！」

バッン！！

ライトが言葉を発すると同時にレーザーは、拡散し細かい線がラウラのシールドを削る。

「なっ！？レーザーに圧力を掛けて拡散に変えただと！！」

ラウラが驚いた事にしてやったりと笑みを浮かべたがその隙が不味かった。

「言った筈だ、戦闘中に隙を出すなと！！」

ビュンビュッ

ライトの後ろからラウラの遠隔操作したワイヤーが片足を縛り上げた。巨大なレールキャノンを向けた。

「んげっ！…ちっ一番から十番行けッ！！」

織斑教官と模擬戦した時にださなかっ武装独立自立型ビットが翼から離れラウラ目掛け弾丸の様に向かって行った。

「何だその武器わ！？私は、知らないぞ！」

回避に専念するためかライトに絡めたワイヤーから意識を話してしまった。そうなれば、ただの鋼線斬るなり外すなり用意になった。

「そりゃそうだ。初めて使ったし、使う機会が来ると思って無かったんでね。十一番から十四番シールドとして待機十五番から二十番一番から十番と共にツイン体制雪月華、微調整頼むぞ。」

「ＯＫ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

ラウラでさえ聞いたことの避ける中ラウラが聞いた無い機械音声とライトの声が聞こえた耳に入った。

と同時にラウラの目の前は、暗くなり気が付くと見慣れた天井自分の部屋だと分かったが何故かベッドに寝かされていた。

「ん、気が付いたか？」

ベッドの横にライトが座り心配そうに見詰めていた。

「あぁ、ライト…私は、負けたのだな。」

「…実は、ラウラのワイヤーで結構エネルギー削られててな…同時にエネルギー切れで引き分けだ。」

「…そうだったか。運んでくれたんだな。」

「まぁな。ドイツで初めての友達だからな。」
ライトは、頬を掻き照れ臭そうに言った。
それに対してラウラも笑みが零れた。
「友達…初めての言われたな…ライトが私にとっても初めての友達だ／／」
「そうか…」
ライトが少しうつ向いた。
「どうかしたのか？」
「実は、明日ドイツをたって日本のＩＳ学園に行く事になった。」
「えっ…」
そうだ。ライトは、元々技術を学ぶために此所に来たのだ。そして、織斑教官に日本のＩＳ学園に入る様に連絡が来たのだ。気絶したラウラを運んだ後直ぐに。
「ライト…行かなくてわならないのか…」
「あぁ…」
「な…ら、準備し…ん！？」
さっきまで笑みが零れラウラが今にも泣きそうな声を絞りだそうとすると何か暖かい物で包み込まれた。

「ラウラ…俺…君に出会えて良かったこんな俺と仲良くしてくれて嬉しかった」

ラウラは、ライトの声が耳元で聞こえライトが抱き締めてくれていると知ると…

「私も…ライトに出会えて良かった。」

「さよならは、言わない。また会おうなラウラ。」

「グスッまた一緒に…グスッ……」

ラウラは、ライトの胸の中で泣き彼の暖かさに包まれながら眠りについた。目が覚めると、ライトの荷物は、無くなっていたが微かにライトの温もりを感じた。

「この部屋こんなに広かったんだ。ライト…次会ったらもう私は、離さないから。」

ラウラとライトの新しい歩みが始まる。

黒ウサギ（後書き）

作者が思うに原作ラウラが捻れたのは、織斑教官の精神ケアーをおこたたったものと考え、主人公に好意を寄せる様にしました。
次回ＩＳ学園本編に入る予定です。束さんによる無茶苦茶な放送をしてもらう予定です。

駄文読んでくれてＴｈａｎｋ　ｙｏｕ！！

降り立つ（前書き）

単行本に無い内容なので想像で書きました。では、どうぞお楽しみ下さい？

降り立つ

ドイツから飛行機で、日本に渡り空港に着き…

「ふ～ここが日本ね～」

ライトが空港から出てＩＳ学園最寄り駅まで歩いて行くとやたらと女性からの視線が痛い。

「ねぇ見て彼じゃない？」

「えっ本当だ！？」

「彼が噂の！」

ライトは、気になり話をしている女性に聞いてみたところどうやらテレビに取り上げられていたらしいしかも束さんが代替的に。電気屋だろうか今まさに聞いた内容がテレビ放映されていた。

『ニュースをお届けします。一週間前にＩＳ発案者篠ノ之束博士より送られた映像ですでは、どうぞ』

テレビに何時もの様に、ウサギ耳を付けのほほんとした束さんが写っていた。

「元気にしてるんだな。」

『「ハロハロ天才束さんだよ今日は、ビックニュ～ス何と私の見つけた初男の子でＩＳを使える子見付けちゃった♪その名は、ライト・

スヒィルス君。もし彼にチョッカイ出したらその国一つ消えちゃうかも♪じゃ、ばいびぃ～♪」以上が束博士より送られた映像です。なお先日二人目の適合者が…』

名前を言うところで自分の顔写真が出された。

「うわっ…なて言うか面倒な…事を」

テレビを見た人達が俺の顔を見るなり逃げ腰になっている。

「何この危険物扱い！？」

さっきの映像のお蔭？で、絡まれる事無く最寄り駅に着き誰も乗っていない電車（モノレール）に乗り移動中

「へぇ～学園って言うからそれなりと思ったけど、島一つが学園何だな。」

目の前に映るのは、回りを海に囲まれ幾つものドームが有り、搭だろうか？がそびえ立ち白い学園だった。

『ご乗車有り難う御座いました。次は～終点ＩＳ学園前～お忘れ等御座いませんようお気をつけ下さい。』

電車を降り、ホーム（駅）を出ると懐かしい人が出迎えてくれた。

「お久し振りです。教官…いえ今は、織斑先生ですね。」

「ふっよく来たな。スヒィルス少しは、強くなったか？」

「さぁどうでしょう？」

「相変わらず食えん奴だな。まぁ良い一応入試だ一戦どうだ。」

「願ってもない。嬉しいですね強い相手わくわくしますよ。」

「では、着いてこい。」

先生に連れられ、さっき見えていたドーム…アリーナと言うらしい所に連れてこられた。回りを見ると同じ試験者だろうか女性がちらほら見える。１つの部屋につくと…

「スヒィルス、ここでスーツに着替えてこい。その後会場に連れて行くからな。」

「了解。直ぐに着替えますね。」

ライトのＩＳスーツは、長袖タイプでお腹当たりが露出しており、パンツも脛真ん中辺りまで有り他のと比べて露出度が極めて低いのに着替え待ってくれている先生の元に行った。

「スヒィルスお前達男は、アリーナの一室を使って着替える様にしろよ。では、行くぞ。」

歩いて行くと発艦場（ピット）所みたいな所に行き…

「あれの試合が終わった後お前の試験だからな。」

「了解。所で先程男達と言いましたが俺以外にも？」

先生は、額にてをやり

「私の愚弟だ。今試験してる奴だ。」

アリーナ内を見ると、女性と男が対峙し女性が突進し男が横に避けると…

バシィン！

「きゃぅ！！」

自滅した。

「……あの～織斑先生、女性の方が自滅しましたが…」

「……はぁ」

更に頭を抱えた。

ピットに女性が戻って来ると…

「山田先生！慣れない男だからと自滅して…」

「済みません済みません済みません済みません」

激突した緑髪の女性は、この学園の先生だった。

「織斑先生この子は？」

「短い間だったが私の弟子ライト・スピィルスだ。」

「えぇ～じゃあ師弟対決ですか！？しかも初ＩＳを使える男の人！！」

「うヴん…スヒィルス、準備出来たら出ろ。私は、先に出る。」

咳を一つつき日本製ＩＳ打鉄を纏い先に出た。

「久し振りだ全力だ！！雪月華！」

「ＯＫ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

ＩＳを起動させ、カタパルトに脚を置き

「ライト・スヒィルス雪月華出撃するぜ！！」

バシュッ！

体を前に傾け大空に舞う白銀の雪月華。

アリーナ内織斑先生が試験相手と知り観客席に続々と生徒達が集まって来た。

「御待たせしました。織斑先生。」

「いや、待って無いさ。訓練見たいに手を抜かず全力で来い。」

試験のカウントが両者の間に標識された。

「あれ、気付いてましたか？」

？

「当たり前だ、伊達にスピィルスの師匠を名乗ってないからな。」

？

「じゃあ師弟の胸を借りるつもりで全力で行きますよ！」

？

「さぁ来い！！」

？

ライトの試験が開始された。

「一番から四十番まで射撃及び斬撃四十一番から五十番防壁に！さぁ行くぜ！！」

各ビットに指示を出し、手に射撃ライフルを出し打ち出す。

「ちっ…本当に手加減していたのだな。見たこと無い物ばかりだ！？」

ライフルから出るビームとビットからなる射撃斬撃をかすりながらも避けて行く。

「流石ですね、師匠。訓練の時は、ブレードとレールガンだけでしたからね。じゃ行きますよ」

ライフルを消し代わりにソード（両刃刀）を双振り出しイグニッションブースト（瞬間加速）で接近し切り付けようとしたが

「まだまだツメが甘いな。そら！！」

ビットと射撃でかなりのエネルギーを消費していた。師匠の斬撃が当たる瞬間一振りの剣で弾き返した。

「師匠もですよブレードは、二本です！しっ！！」

ビィー…『試験終了同時にエネルギーが切れた為引き分け。』

そうライトの斬撃は、確かに当たった当たったのだがビットをしまって無かった為そのままエネルギーを消費しエネルギーが同時に切れたのだった。

「はぁ～盆ミスでした。」

「何を言う。胸を腫れ！ミスだとしても一撃入れたんだ誇っても良いぞ。」

「いえ、なら引き分けで御願いします。」

師匠は、頬を緩め『可笑しな奴だ』と言い

「ようこそＩＳ学園に歓迎してやる。」

降り立つ（後書き）

師匠の威厳は、保つぞ！！
次は、原作主人公と接触だ！！

クラスで男は、二人だけ（前書き）

よおやく一巻始めに突入！！では、どうぞ？

クラスで男は、二人だけ

織斑先生が試験相手で引き分けに終わりこの世界で初めての学園生活になったのだが…

「はいっ副担任の山田真弥です。皆さん一年間宜しくお願いしますね♪」

試験の時に軽く顔合わせをした緑髪のダボダボな服を来た山田真弥先生と言うらしい。しかも、まだなれていないのかアンチョコを見ながら…

「えっとじゃあ最初のＳＨＲは、皆さんに自己紹介をしてもらいましょう。」

せめて、アンチョコから顔を上げて言って貰いたい。

「（ドイツで慣れてて良かった。）」

ライトともう一人の男子以外クラスメートが全員女なのだ。

「…君。」

山田先生が何回か男子生徒に名前言っているが気付かない…

「織斑一夏君。」

「はっはいっ！」

山田先生が近付き名前を読んだところで立ち上がって返事をした。

「ひゃっ！？」

織斑一夏の意気なりの行動に驚き先生らしからぬ可愛い悲鳴を出した。

「あれが、教官の弟ねぇ…なんともふ抜けた奴だな。」

ライトは、教官の弟を見てボソッと呟いた。のが聞こえたのか隣の席に居る布仏本音が此方を向き…

「えっとすー君で良いよね？」

「すー君？」

「スピィルスだからすー君♪」

「まぁ良いけど…また後な、織斑先生が来た。」

布仏本音、体格に合わないダボッとした制服をきたマスコットキャラの様な女の子。前に向き直ると丁度織斑先生の挨拶となった。

「新学期早々騒がしいぞ織斑。」

「へっ？」

「聞いているのか織斑。」

「なっ…んで…」

どうやら織斑弟は、知らなかった様だ。かなり驚いている。

「あっ織斑先生もう会議は、終わられたんですか？」

「ああ山田君クラスの挨拶を押し付けて済まなかったな。諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年間で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる逆らってもいいが私の言うことは、聞けいいな。」

ドイツに居たときに聞いた内容と同じことを聞きライトは、『変わらないな』と思った。教室がまるで津波の前触れの様に静まり…

「き…」

「すー君耳塞いだ方が良いよ。」

「ん…了解」

布仏に言われた通り耳を塞ぐと同時に黄色い声の津波が押し寄せた。

「キャ――――――！千冬様本物の千冬様よ！」

「美しすぎます！」

「愛してます！」

「恐れ多くてお顔を見れません！」

「ずっとファンでした！」

「お姉様に憧れてこの学園に来たんです／／！」

「私お姉様のためなら死ねます！」

波が少し引いた所で肩を布仏が叩きＯＫサインを出してくれた。

「有り難な、布…本音。」

「すー君名前で呼んでくれるんだね。どういたしまして♪」

また織斑先生の方を向くと頭に手をやり

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ感心させられる。それとも私のクラスにだけ集中させてるのか？…はぁ…まあいい織斑自己紹介を続けろ」

「え？ああ……う゛」

織斑は、後ろを向き…顔を青くしライトの方に助けを求める様な視線を受けたが『……』無視する事にした。涙目になっているがな。

「えーえっと織斑一夏ですよろしくお願いします。あれ？箒？」

スッパァン！！

「痛ッ」

何とも微妙な挨拶をした織斑一夏に首席簿による打撃がおろされた。

「お前は、自己紹介もまともにできんのか。」

「いや千冬姉…俺は…」

パァン

「学校では、織斑先生と呼べ。」

二度も頭をしばかれた織斑一夏は、頭を抱えて沈んだ。

「よし、最後を頼むぞ。」

最後の最後で自分の番が来た。

「ここに来る前まで、ドイツに居たのですがこの学園に通う事になりました。ライト・スピィルスです。国や文化の違いで、不馴れな事も有ると思いますが宜しくお願いします。」

「織斑、あれが自己紹介だ。さあ！！ＳＨＲは、終わりだ。諸君らには、これからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう！！その後実習だが基本動作は、半月で体に染み込ませろ。いいかいいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ私の言葉には、返事をしろ。…いつまでそこに居る席に付け。」

頭をまだ抱えて居た織斑一夏を一蹴りにし教室を出て行った。その後休み時間になり、中の良いグループで集まり話している。織斑一夏を除いて。ライトは、先程の本音と話して居たりする。

一夏再度ｉｎ

（回想）２ヶ月前２月の真ん中俺は、中学三年受験の真っ只中その受験会場の公共施設で俺は―――

「何だよここ。ほとんど迷路じゃねえか…」

迷った。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ。俺は、それでだいたい正解なんだ。」

少し歩いた所にドアがあった。

「よしドアだ入っちまえ…すいませーん。」

ドアを入ると女性が居た。

「ん？ああ君受験生だよね」

「えあはい。」

「向こうで着替えて、時間押してるから急いでね。ここ四時までしか借りれないから。」

女性の指示にしたがって向かった。カンニング対策か大変だなとその程度だった。更衣室に何故か置いて有ったＩＳに興味本意で触ってしまい…気が付いたらＩＳを起動男で機動させてしまった。あれよあれよと――

回想ｅｎｄ

「（俺は、今世界で二人目の『ＩＳ』を使える男としてＩＳがくえんにいる）」

女生徒しかいないはずのＩＳ学園に二人の男が現れると当然好奇のめで見られる。

「（唯一俺と同じ男は、すでに女生徒と話して居るし…助けてくれ――。）」

一夏再度ｅｎｄ

クラスで男は、二人だけ（後書き）

オリキャラの為の作者によるストーリーになってるはず！！次回、オルコット出せるかな？

女尊男卑（前書き）

セシリア・オルコットでた！！台詞長いよ！！指疲れた！
では、どうぞ。

女尊男卑

ライトは、本音とのんびりと話していると一夏の前に長い髪の毛をピンク色のリボンで結わえた女生徒が立っていた。

「一夏話がある」

「箒？」

どうやら、織斑一夏の知り合いらしい。女生徒は、一夏をつれ廊下に出て行った。

「すー君、話して聞いてる？」

一夏を見ていたため反応が遅れた事に謝り話に戻った。

「ごめんな。」

「仕方ないなぁ～もう一度言うね。再来週にクラス対抗戦が有るけど、立候補しないの？」

「クラス対抗戦か…俺は、パスだな。自己紹介の時も言ったけど今まで軍に居たからスポーツとしてＩＳ動かすの抵抗有るんだよ。結局、高性能の兵器だからな。」

「あ～確かに、近代兵器の中でトップクラスだもんね。」

「で、兵器をスポーツの道具にするってのわなぁ。それにそういうのは、戦争を知らない奴が適任だと思うぞ。」

「分かったよ、すー君がそう言うなら仕方ないね。」

「ごめんな。有り難う本音。」

クラス対抗戦の代表者に推薦したかったらしいが、断ると素直をに引き下がった。頭を撫でながらお礼を言うと…

なでなで…

「うにぁ～♪」

「（子猫みたい…撫で心地良いな♪）」

本音の頭を撫でて居ると回りの女生徒から『うわっ気持ち良さそう』『私も撫でて欲しいな』『本音ちゃんズルい』等聞こえてきた。予例のチャイムがなると、ライトは、手を離した。

「あっ…」

「どうした？」

「もう少し…何でもないよ♪」

「そうか、あれまだ織斑一夏戻って無いのか。」

本例の３０秒前に織斑先生と山田先生が来て、５秒に織斑一夏と箒？が帰ってきた。

パシッパシッ

「遅いぞさっさと席に着け織斑と篠ノ之。」

「「済みませんでした！！」」

本例がなり、二人が席に着いたのを確認し織斑先生が教壇にたたった。

「それでは、この時間は、実践で使用する各種装備の特性について説明を…ああその前に再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

ライトと本音との会話を聞いていたため女子の目が織斑一夏に集中した。

「は――――い！！織斑くんが良いと思います！」

「おっ俺！？」

「ナイスアイデア！」

「私も良いと思います。」

「ちょっと待った俺そんなの」

織斑一夏が辞退しようとしたが先生が追い討ちをかけた。

「自薦他薦は、問わない他に候補者は、いないか無投票当選になるぞ？ちなみに他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は、覚悟しろ。」

「い　いやでもっ」

二人の言い争いに待ったの声をかける者が出てきた。

「納得できませわ！！そのような選出は、認められません！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにこのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然です。」

正直こういうタイプは、嫌いだ。今の世の中ＩＳのせいで女性は、かなり優遇されている。優遇どころかもはや女＝偉いの構図にまでなっている。しょせんＩＳに乗れる人だけの話しなのだがな。発言したオルコットは、いかにも現代女子（勘違い）してる者である。

「良いですか！？クラス代表は、実力トップがなるべきそれは、わたくしですわ！何せわたくし入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですからイギリス代表候補生でもあるわたくし以上に相応しい人間は、いないはずですわ。」

ライトが手を上げた。

「どうしたスヒィルス。」

「織斑先生俺は、オルコットを推薦する。」

ザワ

「スヒィルスお前は、出なくて良いのか？」

「織斑先生並みが一年に居れば。」

「そうか…そうだったな。」

ライトの発言で試験会場に居た女生徒が反応した。

「スヒィルスくんって確か織斑先生が試験相手だったった！？」

「お姉様相手に引き分け迄もっていった！！」

「静かにしろ有れは、私に一太刀入れたスヒィルスの勝ちだ。最も本人は、認めなかったがな。」

さっきまで、まくし立てていたオルコットが止まってライトの方を見た。

「織斑先生と引き分けいえ…一太刀入れたですって本当ですか！」

「あの試験は、記録上引き分けだ。それ以上でも以下でもない引き分けだ。」

そこに今まで黙っていた織斑一夏が一言

「俺も倒したぞ教官」

「なっあなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーと落ち着けよ　な？」

「これが落ち着いていられますか！！わざわざこんな島国にまで来たうえに極東の猿と比べられるなんて…このような屈辱耐えられま

せんわ！！」

「イギリスだって島国出し大したお国自慢ないだろ。」

ザワザワ

「なっあっあっあなたねえ！？わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

バンッ！！

「決闘ですわ。」

「いいぜ四の五の言うより分かりやすい」

コツ！コツ！

「なんだ？」

「なんですの？」

二人の頭に軽い衝撃が有り後ろを見ると…羽型のビットが二人を捉えていた。

「ブルーティアーズじゃない！？」

「織斑一夏　セシリア・オルコット互いに相手の祖国を侮辱したんだ謝れ。」

隣の生徒の声が優しさが無くなりハイライトは、消え声は、酷く冷たくなった。近くにいた本音は、恐れた。この状態のスピィルスを知る織斑先生は、焦った。

「二人とも早く、認め謝れ！早く！！」

二人が断固として罪を認めないでいるとビットにエネルギーが溜まる様に先端が赤々と光出した。流石に危険を感じた二人は、速攻に謝った。

「も…申し訳有りませんでした。祖国を侮辱しまして。」

「お…俺も御免オルコットの祖国を侮辱した。済まない。」

「スヒィルス…二人とも謝ったぞ早く凶悪な武装を解け！！」

ビットから赤い光がおさまり元の白銀色に戻り粒子となって消えた。

「とにかく話は、まとまったな。勝負は、一週間後の月曜日放課後第三アリーナで行うそれぞれ用意をしておくように」

「「はい！！」」

「スヒィルス、レールガンを撃って怪我人を出さなかった事だけは、誉めてやる。だが、もう少し感情を押さえる努力をしろ。」

「…了解」

このクラスで暗黙のルール「「「決してスヒィルスくんを怒らせては、ならない。下手すると地獄を見る。」」」が出来た。

女尊男卑（後書き）

ライト！？昔何が有ったのさ！織斑先生が焦るって何！？

次回：部屋割り

部屋割り（前書き）

警告？キャラクター崩壊！！注意されたし。

部屋割り

放課後教室に残り、織斑にＩＳについて教えている。

回想

「愚弟を頼むぞスヒィルス。」

「俺からも、頼むスヒィルス！ＩＳについて教えてくれ！！」

セシリア・オルコットに決闘を申し入れられた後織斑先生に織斑一夏の勉強を見てやれと言われ、織斑一夏にも頼まれたので放課後の時間を使い、自分の知りうる限（束さんに教わった）りの事を教本に照らし合わせながら教える事になったが…

回想終

「織斑、さっきも言ったろ？ＩＳコアは、全部合わせて４６７機（雪月華を除く）」

「えーとＩＳコアは、篠ノ之束博士以外造る事が出来ないだっけ？」

「よし、覚えて来たな次に」

「あっまだいましたね、スヒィルスくんと織斑君。」

次の問題に入る時名前を呼ばれ振り向くと

「どうかしたんですか、山田先生？」

「あっはい、急きょお二人の部屋が決まりました。」

山田先生の発言が負に落ちないのか織斑が問う。

「確か一週間は、自宅から通学するって聞いてましたけど？」

「事情が事情なので無理矢理ねじ込んだそうです。」

山田先生が出した鍵は、２つ？

「山田先生、俺と織斑の部屋一緒じゃないんですか？」

「はい、どちらか好きな鍵を選んで頂く事になりました。」

「なら、織斑一夏先に選べ。」

「俺からで良いのか？山田先生、食堂に近いのはどっちですか？」

「えっと…１０２５室ですね。」

「じゃあそっちで。それと荷物とか有るんで一度家に」

「それなら私が手配してやった。着替えと携帯の充電器があれば十分だろ。ありがたく思え。」

織斑一夏が言い終わる前に織斑先生が来て、ボストンバッグを放り投げた。

「どうも…ありがとうございます。」

「じゃあこれは、スヒィルスくんのですね。」

「どうも。」

「スヒィルスもホテルに頼んで持ってきてあるが何が入ってるんだ。かなり重かったぞ！」

「…ＩＳの簡易修理パックです（束さん作）済みません助かりました。」

「後ですねお二人は、しばらくお風呂が使えません。」

「え何で？」

「織斑年頃の女と入りたいのか？」

「入りたく有りません！」

「俺なら構わんが？」

ライトと織斑の一言で、ライトは『大胆』『私は、一緒に良いよ♪』等　織斑は『女に興味無いの？』『え～ショック！』

「スヒィルス…」

「分かってますよ。節度は、守りますよ。」

山田先生は、『スヒィルスくん駄目ですよ、先生と生徒だと』と呟

きくねくね体を動かしている。

「スヒィルス、どうにかしろ。」

「仕方ないな。山田先生バキュンしてパオーンでガルルしますよ？」

「はぅっ　／／／／／！？」

山田先生が真っ赤になって動かなくなった。

「……／／」

「……」

「わ…私は、織斑を寮に連れていく。山田君をどうにかしておいてくれよ。」

「じゃあまた明日な、スヒィルス。」

織斑先生が、織斑一夏を連れていった後教室にライトと顔が真っ赤で固まった山田先生が残された。

「……うぶ過ぎますよ、山田先生（汗」

山田先生が復旧するまでああだこうだしかれこれ３０分ようした。

「／／…我慢出来なくなったら／／／言って下さいね♪」

「あはは…（汗）」

部屋割りの結果

織斑一夏＝１０２５号室

ライト・スピィルス＝１０２７号室

頬が赤くなった山田先生が教室から出た後、自分に宛がわれた部屋に向かった。織斑一夏の部屋のドアは、何かで突き刺したような穴が開いていた。
ライトが１０２７号室に来た。鍵を開け中に入るとそこに

「狐？」

「あっ、すーくんだぁ～♪」

狐の着ぐるみを着た布仏本音がいた。

「どうしたのすーくん？」

「…あぁ、しばらくこの部屋に住むことになった。」

山田先生に渡された、１０２７号室の鍵と札を見せた。

「本当だ♪わ～いすーくんと一緒だ♪」

狐の尻尾が嬉しさを表現する様に動き、耳がピクピクと本物の様に反応していた。

「（どうやって動いているんだ？）」

「あっそうだ♪すーくん、休み時間の続きして♪」

「休み時間の続き…そういうことか。」

ベッドに胡座をかいて座るとその上に本音が乗り撫でるがままになっている。

「うにぁ～♪」

「撫でられるの好きなのか？」

「うん♪すーくんのて温ったかなんだよ♪じゃあ、夕食に行こっか♪お風呂は、部屋のシャワー使ってね♪」

「ん…分かったじゃあ夕食に行くか。」

「じゃあ、手繋いで行こっ♪」

「はい。」

ライトが手を出すと嬉しいのか手を握り食堂に向かった。食堂に本音と向かうなか何ともいずらい目線を受ける。

「すーくん人気者だね～」

「いや…人気者と言うより珍獣扱いな気がする。」

二人の目線の先にも同じ様な視線を受けてる奴がいた。そいつわ同居人だろうか、一緒に食事をとっていた。

「……本音、部屋でとらないか？」

「すーくんがそうしたいなら良いけ…遅かったみたいだよ。」

「お～いスピィルス！」

「チッ気付かれたか…」

ライトが食堂に着たことに気づき席を開け此方に来るように呼んだ。

「仕方ないな腹くくるか。本音、織斑の所に行って席の確保頼むわ。食事持って行くかから。」

「じゃあ、狐うどん御願いね～♪」

「了解。」

食堂のおばちゃんに食券を渡し、本音と自分の料理を持ち織斑達の席に向かった。

「はいお待ちどうさま。」

「ありがとね、すーくん♪」

狐うどんを本音の前に置き席に着いた。

「そうそう、紹介しておくよ隣に居るのが俺の幼馴染みで同室になった…」

「篠ノ之箒だ。宜しく。」

「ん篠ノ之？…束さんの親族か何かか？」

「悲しい事に私の姉だ。」

「へえ～束さんにお世話になってたからなぁ～」

ライトの言葉に篠ノ之と織斑が反応した。本音は、狐耳だけ動かし、うどんをすすっている。

「束さんと知り合いなのか！？」

「知り合いって言うか…助手？」

「助手…なぜ疑問系なんだ？」

「ん～初めて来た場所（世界）で困って（いく宛無し）たら、束さんに助けられて…ＩＳ（魔力動力の）を動かしたらデータ取り兼助手みたいな事になってたな。助手って言っても、部屋の片付けとか料理とか洗濯とか家事全般？」

「姉さん…だらしなくなりすぎです。」

「ちょっ待て、束さんの所でＩＳ動かしたのか！？」

「あぁ…」

「ふう～ごちそうさま。あれすーくんまだ食べて無いの？食べさせてあげようか♪」

織斑達と話していてあまりてを着けていなかった。本音に箸を奪われた。

「本音、大丈夫だから。」

「まぁまぁ、すーくんあ～ん♪」

「いやだから」

「あ～ん♪」

「いやあの～（汗」

回りから特に篠ノ之箒が自分の箸を見て織斑の方をチラチラ見ている。成り行きに期待した目が…

「あ～ん（諦め）」

「美味しい？」

「あぁ美味いよ。」

「えへへ♪なら次は、和え物だよ～♪」

横目で篠ノ之を見ると赤面し織斑は、笑いながら食べていた。

「（早く終わってくれ…）」

「すーくんまだ残ってるよ♪」

お吸い物以外が空になるまで続いた。

「（頼むから勘弁してくれ…）」

部屋割り（後書き）

妹キャラ？本音をオリ主にくっ付ける予定です。
予定上のヒローイン
ラウラ・本音・真弥（山田先生）以上三名。

クラス代表決定（前書き）

戦闘シーンはぶいて、管制室での内容にしました。

クラス代表決定

クラス代表決定戦まで後６日

食堂

織斑達と朝食を食べていると…

「ＩＳのこともっと教えてくれないか？このままじゃ来週の勝負何も出来ずに負けそうだ…」

織斑がライトと篠ノ之に言ってきた。

「下らない挑発に乗るからだ馬鹿め」

「織斑、体力つけとけよ。ＩＳは、自分の動きをトレースする。そこにちょうど良い先生が居るだろ。なぁ全国剣道優勝者、篠ノ之箒。」

織斑に篠ノ之が呆れて言い、織斑による情報から篠ノ之に指導してもらえと言った。

「なぜ、それを知っている！？」

「おりむ～がすーくんに誇らしげに話してたよ～」

本音が織斑が自分達に情報提供した事を言ったが…

「そ、そうか一夏が…」

話を途中から聞いてなく『織斑が』と何度も呟いていた。

「これは、間違いないな？」

「だね～♪」

「何がだ？」

篠ノ之の状態で理解出来ていないのか頭に？を浮かべていた。

「織斑にまかして、先に行くか？」

「だね～♪」

「じゃ、馬に蹴られる前に退散しようか？」

「ん♪じゃおりむ～、しかりね～♪」

食事をさっさととって食堂を後にした。放課後の時間が篠ノ之との訓練になり…放課後の道場にて。

カンッカッダンッ

竹刀を弾き板を強く足で蹴て相手の面を捉え

パァン！

「一本それまで！」

篠ノ之と織斑の審判をライト（本音は、生徒会）がしていた。試合は、篠ノ之の面打ちの一本勝ち。

「ふう」

「はぁっはぁっはぁっ」

慣れた手付きで面を取る篠ノ之に対して、息が切れ倒れる様に面を外す織斑。

「おい！どうしてここまで弱くなっている？」

「中学三年間ずっと帰宅部だったからな。竹刀握ったのも久しぶりだ…でこれがＩＳに役立つのか？」

「―なおす…鍛えなおす！これから毎日放課後三時間私が稽古をつけてやる！！」

「は？いや俺は…」

「ククククッ頑張れ織斑。」

「っておい！スヒィルスは、どうなんだよ！？」

「ん、俺か？」

「スヒィルス！箒と試合してみろ！！」

試合旗を織斑に渡して竹刀を奪い取った。

「おおい防具は、つけないのかよ!?」

ライトは、織斑から取った竹刀で体を伸ばしながら篠ノ之前にたった。

「構わねぇよ、殺し合いを知らない奴なんてなぁ…」

管理局で培ってきた、実戦経験と一般スポーツでしかない命のやり取りの無い、相手との試合は、対峙した瞬間篠ノ之は、気付いた。

「なっ…なんだ!?（体が動かないだと!!）」

人間自分の経験以上の相手と対峙すると、本能的に危険を感じ…

「はぁはぁっくぅ…」

「どうした。まだ、構えてるだけだが?そんなに汗かいちゃって。」

ザっ…

ライトが一本近付くと篠ノ之は、下がる。端から見ると何の変てつも無い試合なのだが…篠ノ之には、真剣を向けられる・向けられていると恐怖を感じていた。篠ノ之の異常に気が付いたのは織斑だった。

「この試合中止!!」

織斑の声でライトは、竹刀を腰に納め篠ノ之から離れると糸が切れた見たいに崩れた。

「大丈夫か！箒！？何をしたスヒィルス！！」

「ん～あっ竹刀ありがとね。」

「あっはい！」

ライトは、名も知らない部員に竹刀を渡して織斑に向き直り…

「心配するな、ただの気当たりだ。直ぐ元に戻るよ。そうそう、織斑…」

名前を呼び声を低く威圧的に…

「生きるか死ぬかの実戦も無い奴が俺と交える資格わ無い。スポーツ止まりなんだよ。織斑、ＩＳもしょせん人に向ければ凶器でしかない。扱う奴で、武器でわ無いと言った奴がいたが…それは、禁弁だ。殺す殺される覚悟の無い奴が戦うな。覚悟の無いやつは、相手を無闇に殺すだけだ。理解し覚悟しろ。おっ篠ノ之が気が付いた様だな。」

「箒！大丈夫か！！」

「大丈夫だ。スヒィルス、お前戦争を経験したのだな。」

途中から起きていたのか聞いてきた。

「戦争…ちと違うな俺は、今まで犯罪者の取り締まりをしていた。相手が此方を殺そうとしてくるそれを、相手を殺さず捕まえる仕事をしていた。」

「殺そうとする相手を…」

「……」

「後任す。しょせん裏を知らないなら仕方ないさ。お前等は、血生臭い世界でなく表の世界で生きて行け。」

篠ノ之頭を一撫でして、道場から出た。手を離した瞬間『あっ…』篠ノ之言葉は、聞かなかった事にした。

―翌週月曜日クラス代表戦当日第三アリーナ―

「なぁ…箒？」

「なんだ一夏」

「この一週間　剣道しかしてこなかったんだがＩＳのこと教えてくれる約束は、どうなったんだ？」

織斑から目線を外した。

「仕方ないだろ、あれ以来一夏がライトを避けていたんだから。」

「まぁ、そうだけど…知識とか基本的なこととかあったろ…って！目をそらすな！」

剣道場の一件以来織斑は、スピィルスを避け。篠ノ之は、ライトと呼ぶようになりしつこく剣道に誘うようになった。

織斑と篠ノ之の元に慌てる足音と冷静な足音が近付いてきた。

パタパタ　コッコッ

「はぁっはぁっ」

「山田先生どうしたんですかそんなに慌てて」

「あのですねっ」

山田先生は、急いでいた来たためか肩で息をしている…一緒に歩いている織斑先生と同じスピードって何？

「来ましたっ織斑君の専用ＩＳピットに搬入してあります。今、スヒィルス君が最終調整をしてくれています。早く向かって下さい！」

「え？あの」

「時間がありません急いで！」

「アリーナを使用できる時間は、限られている。ぶっつけ本番でものにしろ。」

織斑の背中を両手で押していく。スヒィルスとＩＳが待つピットに連れて行った

「ようやく来たな。コレがお前の専用ＩＳ［白式］だ。」

織斑の目の前には、一言で言えば白。白一色のＩＳが鎮座していた。

「調整は、終わったがファーストシフトは、まだしていない。運が良ければこの試合でお前は、化ける事ができる。おら、さっさと着替えて装着しろ！！」

スーツに着替えて来た織斑は、織斑先生に言われるがままＩＳを装着する。

「背中を預ける様にしろ…ああそうだ…後は、システムがお前に合わして最適化してくれる。ハイパーセンサーは、問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

織斑先生は、ＩＳを装着した弟が気になるのか教師と生徒でなく、家族呼びになっていた。それに織斑が答える。

「大丈夫、千冬姉いける。スヒィルス、ごめん…また教えてくれ。箒行ってくる。」

「負けたら、地獄メニューな。」

「……ああ勝ってこい。」

織斑は、アリーナに出ていった。

管制室

織斑とオルコットが映し出されている巨大モニターを織斑先生・山田先生・篠ノ之・ライトが眺めている。

「へぇ～オルコットのＩＳ、ブルー・ティアーズか。中遠距離型か…こりゃあちと厳しいかな？」

ライトの言葉に、３人の目が向き

「どういう事だ？」

「箒…織斑のＩＳわな、基本積まれているデータが無かったんだ。」

「基本的なデータって何ですか？」

「織斑が出した武器見てください。」

ライトの言葉でモニターに目をやると、相手が射撃タイプにもかかわらず近距離武器を出していた。

「えっ…ブレード！？」

モニターを見たまま、説明が続く。織斑は、オルコットの射撃ビットから逃げまくっている。

「最終調整でデータを見ててわかったんですが、あのＩＳに積まれている武器は、ブレードの一種類だけ。更に射撃用プログラムも搭載されていませんでした。」

「「えぇぇぇ！？」」

「でもまぁ、ファーストシフトが終われば、チャンスは、有りますよ。」

「それは、いったい？」

「織斑先生ならわかりますよね？雪片」

「まさか…」

「そうです。ドイツで見せてもらった雪片と同じデータが有りましたから恐らくシフト後発動出来るかと。」

ライトの説明が終わるのと同じ頃…織斑は、相手の行動パターンが分かって来たのかビットを交わしながら切り伏せて行き、一気にオルコットの懐に潜り込もうと接近したが…オルコットの膝辺りからミサイルが二発織斑に向け発射され…アリーナ内を爆発による光と音が支配した。

アリーナ内

ドゴォン！！

「存外しぶとかったですが所詮この程度終わりですわ。」

煙が辺りに立ち込めたなかオルコットは、勝ったと思いピットに戻ろうとしたが違和感に気付いた。そうまだ合図が出されていない。爆煙がおさまっていくと中から形の変わったＩＳが出てきた。

「さあっこっからが本番だ！！」

オルコットは、さっきと同じ様にビットで攻撃使用としたがシフトしたＩＳは、細かい微調整が出来るようになり避けかたにキレがで出した。

「まさか…一次移行！？今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

オルコットは、焦り出した。今まで相手にあれだけ手こずったのに

一次移行をしていない状態だったと知りビット操作がお粗末になって織斑に切り裂かれ。

ズガン！

「これで終わりだ！！うおおおお！！」

がら空きになったオルコットに織斑が一撃入れようとした瞬間…終わりを告げるブザーが鳴り響いた。

ビーッ！！

［試合終了―勝者セシリア・オルコット］

「「えっ？」」

斬りかかろうとした織斑と敗けを認めたオルコットは、呆然とした。

管制室でも、気の抜けた声が出ていた。

ピットに戻った二人が着替を済ますと織斑は、管制室に呼ばれた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ…それでこの結果か…大馬鹿者。」

「済みません…その…織斑先生。」

「なんだ？」

「俺…自分がなんで負けたかいまいちわかってなくて…」

「まあ…今回は、ぶっつけ本番という悪条件もあって機体の特性を掴み切れない部分もあっただろうからな…スピィルス。」

「了解。教えてやるから覚えておけよ。」

織斑先生から話を受け継ぎせ教える。

「まずＩＳバトルは、相手のシールドエネルギーを０にすれば勝ちだ。シールドを突破した攻撃のみ実体にダメージを与えられる。ついでに言うと操縦者が死なない様にＩＳには、絶対防御と言う能力が有るが織斑、安心しきるなよ。」

ライトが絶対防御があると言った時織斑は、殺す事が無いと安堵の顔になった所で釘を刺す。

「所詮絶対防御装置と言ってもエネルギーが切れれば相手に直接ダメージが行く。相手のエネルギーが尽きていないなら良いが、０だと…殺す事になる。」

釘を刺されると顔が青くなった。

「っと話がずれたな。でだ、絶対防御は、極端にエネルギーを消耗するためＩＳが破損しても大丈夫だと判断した場合作動しない。」

「白式が肩にダメージを食らっても絶対防御が作動しなかったのが良い例ですね。」

山田先生が補足を入れる。

「そうですよ。この事を念頭に入れた上で言うと、雪片には、特殊

能力としてバリア無効化攻撃が備わっている。」

「バリア無効化？」

「相手のエネルギー残量に関係無く本体にダメージを届かす事ができ絶対防御が作動する一撃必殺の技になる。」

「…って事は、最後の一撃が当たっていれば…」

「当たっていれば織斑の勝ちになってたかもだが、白式は、自分のエネルギーを攻撃に転化する機体だ。ザックリ言うと欠陥機だな。」

「え〝欠陥機…」

「一発位なら大丈夫と思うが、織斑良く考えろ。織斑がダメージを受ければエネルギーは、減る。減った状態で雪片を発動したら…」

「えっと…雪片が自分のエネルギーを消費して攻撃に転化するから…あ！」

「そう言う事だ。エネルギーを消耗し過ぎればさっき見たいに発動しただけでエネルギーが０になる。短期決戦に持って行く事が出来れば最強の鉾になるがまぁ、諸刃の剣だな。」

説明が終わり、アリーナから出た所で…ライトは、オルコットからの言付けを伝えた。

「織斑、オルコットから伝言だ。『わたくし今回の勝負は、負けましたわ。クラス代表をお譲り致しますわ。』だってよ、良かったな織斑。頑張れクラス代表（笑）」

「な…何故だぁ〜！！」

「クラス代表頑張れ一夏！」

織斑の悲鳴の様な叫びが日の落ちた学園に響いた。

クラス代表決定（後書き）

原作通り一夏をクラス代表にしました。裏代表は、ライトですがね（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5692y/

IS乗りは、魔法関係者

2011年11月27日21時46分発行